

戦艦「陸奥」 爆沈の実相

平川 満 陸士60

はじめに

戦艦「陸奥」が爆沈したこと、その艦長が同じ区隊の三好和彦君の父上であったことは、陸士予科に入校して暫くしたころ、彼からこっそりと聞いていた。多分、昭和19年春4月くらいのことであつたと思う。沈没した時期、場所などは一切分からなかつた。大変な事故とは思ひながらも、戦局が一日と悪化し、報道管制が厳しさを増している最中、強いてその細部を確かめたいという気持ちも起こらなかつた。

戦後、隣町の「大和市つきみ野」に住む彼とは、住まいも近く深く付き合つていたが、「陸奥」の沈没に関して、それを話題にすることは全くなかつた。それは、私にはこの大事件は、三好君のご一家にとつては戦時中は勿論、戦後においても大変な心の負担、触れてもらいたくない痛みと考へていたからであるが、一方では、何とか真相を知りたいという気持ちもないではなかつた。

三好君は平成20年7月に亡くなられ、私は区隊会報の「亡き友を語る」

の部分で三好君に触れ、彼のお父上が「陸奥」の艦長であつたことを述べた。

その直後、所用があつて駅前に出た際、ぶらりと近くの古本屋に入つてみた。店先には百円均一の古本がずらりと並べられていた。その一面を何気なく見回したとき、表紙に強烈な赤の太文字で「陸奥爆沈」と書かれた一冊の本が私の眼にとまつた。著者は戦記物作家としても名の知られた吉村昭氏である。

私はこの本に出会えたことに何か因縁めいたものを感じた。読んでいる間、三好君の面影が紙面に重なつて消えなかつた。そしてもう少し早目に氣付いていたらと悔やむ気持ちが強かつた。

それと同時に、この本を読んだだけで、自分の胸の中にしまひ込んでしまふのは勿体ないことではないか。もし事件に関心のある人があれば知つてほしいという願望もまた沸き上がつてきた。自分なりに整理して紙面として残しておこう。そう考へてまとめたのが本稿である。

なお、「陸奥」爆沈の概要については、吉村昭氏「陸奥爆沈」を参考に、私なりに要約した。

「陸奥」爆沈の概要

1 爆沈当日の状況

昭和18年6月8日、日本が世界に誇る戦艦「陸奥」は瀬戸内海の柱島泊地に投錨していた。実はその前、第2戦隊（「長門」「陸奥」「扶桑」など強力艦により編成）を主力とする第1艦隊は、北太平洋アメリカ海軍主力を攻撃するため、弾薬、燃料、食料等を満載し出撃準備をととのえていた。が、アツツ島が玉碎（昭和18年5月29日。守備隊長は山崎保代大佐…本誌10月号「先人の足跡」に掲載）したため、ついに

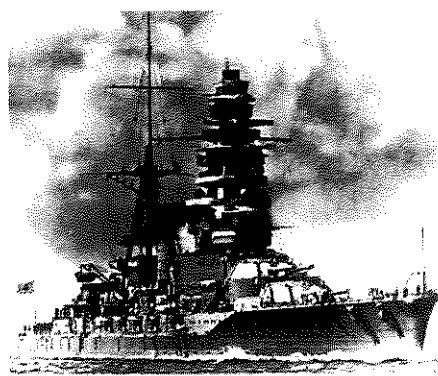
出撃命令が出ることなく、そのまま柱島泊地にとどまつていた。当時、柱島泊地に投錨していたのは、「陸奥」「扶桑」以外に、軽巡「竜田」、駆逐艦「若月」「玉波」などで、「陸奥」に一番近い位置にいたのが戦艦「扶桑」であつた。旗艦の「長門」は、修理等のため呉軍港に入つており、この泊地にはい

なかつた。

戦艦といへば、今では沖縄特攻に出撃して九州南方海域で悲壮な最期を遂げた「大和」、レイテ沖海戦で撃沈された「武蔵」という世界最大超弩級の2戦艦が強く印象に残っているが、これらは、戦前・戦中も秘密のベールに包まれたまま遂に国民の目に触れることはなかつた。

一方、戦艦「陸奥」及び同型艦「長門」は、日本海軍が世界に誇る最強戦艦としてその雄姿は教科書や雑誌にも

紹介され、国民にも親しまれ、それへの期待と信頼は大きかつた。



出典：ウィキペディア

【陸奥の諸元】

大正10年10月24日竣工。「長門」と

同型艦

常備排水量 3万3800トン

速度 公表23ノット

主砲 40センチ砲 8門（昭和11年

9月改装）

排水量 3万0905トン

「陸奥」艦長、三好輝彦大佐（海兵43期）は、当日午前、「陸奥」から1000m離れた場所に停泊していた「扶桑」を訪問された。「扶桑」から「武蔵」の艦長に転出される艦長吉村啓蔵大佐の見送りのため、また新たに「扶桑」の艦長に着任された鶴岡信道大佐が前

日に挨拶に来られたので、それへの答礼のためであった。

それらの行事が無事終わった後、新任の鶴岡大佐からは「折角だから昼食を共にしたら」と会食の誘いがあったが、辞退して帰艦された。そして昼食を終え艦長室でくつろがれているところだった。

運命の時刻、6月8日午後零時10分頃である。「陸奥」の艦の後方3番、4番砲塔の付近で突然煙状の異状噴出が起きたことを甲板上にいた者達が発見した。「何事。」と確かめんとした直後、物凄い爆発が起きた。巨大な赤黒い火の柱が噴き上がり、その凄まじい轟音と振動は周囲を圧した。空に吹き上げられた鉄板がばらばらと落下してきた。まさしくこの世の修羅場と化してしまった。

4万トンに近い巨艦（全長225m、全幅30m超）は無惨にも艦の後尾付近で2つに裂け、やがて右舷方向に傾きながら数分の間に海中に没してしまっただ。じつにあつという間のできごとであつた。

乗組員1千474名中、死者約1千121名、すべての装備もろともくろがね（鉄）の浮かべる城は、その巨体を海底40mに沈めてしまった。

当時、濃霧が「陸奥」の艦影を厚く覆い、近くの島でも凄まじい音は聞こ

えたが姿は見えず、わずかに得体の知れない黒煙の噴き上がるのが認められただけだった。

海軍はこの事故の情報が特に敵国米英に漏れることを最も恐れた。

そのため生存した乗組員（当日入校出張中の者を含む）は勿論、周辺にいた他の艦艇、呉基地関係者、乗組員の家族、周辺の島民、その日近くで操業していた漁師などきわめて広範囲にわたり徹底した機密保持を図り、部内外への一切の報道を禁じる処置をとった。

2 真相の究明

戦局が厳しさを増している最中でのこの大事件の発生は、海軍としても最も迅速に、そして短期間に結論を出すことが迫られた。

爆発が艦内事情で起こったものか、あるいは、外部から攻撃されて起こったものか、まずはつきりさせる必要があつた。

海軍は、真相究明のための査問委員会（M委員会）を爆沈の日の午後設置した。

「陸奥」が沈んでいる海底は水深約40m。強い水圧、速い潮流、流れ出る重油、視界不良などの悪条件の中で潜水による調査が行われた。潜水調査により、船体が沈没している状況や爆発箇所の確認、弾丸、装薬等証拠となる

品物の搬出、遺体の引き揚げ等が進められた。同時に、生存者からの聞き取り調査も行われた。

潜水調査は難航を極めたが、逐次真相も明らかにされてきた。損傷が最も激しい部位は3番砲塔の弾薬庫付近で、艦もその部分で2つに裂け折れ曲がっていた。爆発は3番砲塔付近で起きたと判定された。そして、この大爆発の原因は、ガスとか蒸気などの爆発ではなく、大量の装薬が一挙に大爆発した結果と結論づけられた。また、爆発は艦内で起こったもので、外（敵）から攻撃されたという形跡は見当たらなかった。

このことにより、当初最も懸念されていた敵の潜水艦による魚雷攻撃、爆雷への接触、航空攻撃の線はなくなり、当局としてはひとまず安堵の胸を撫で下ろした。

では何故、大量の装薬が一挙に大爆発したのか？

M委員会としては、その可能性について二つのことを想定した。

一つは、保管中の弾丸、火薬になんらかの化学反応が起こり、それがもとで自然発火し、誘爆を起こしたのではないか。

もう一つは、最悪の事態であるが、誰かが弾薬庫に侵入して故意に放火したのではないか。

このような想定の中でまず、M委員会が疑ったのが「弾薬、装薬」等の自然発火であり、その検証を重点的に進めていった。そして、その対象になつたのがその当時海軍が対空戦用として開発した「陸奥」にも搭載していた「三式対空弾」の自然発火であつた。

「三式対空弾」は、開発されて間もなく太平洋戦争を迎えたため、安全性を十分にテストする暇がなく、一部では初めからその搭載を危ぶむ声があつた。もし「三式対空弾」に自然発火の可能性があるとすれば、搭載している全艦艇でも同じことが起こりうることになり、危険の上もない。早急な回収が必要となる。しかし、広範に展開し作戦下にある全艦艇からの回収となると、ほとんど不可能に近い。

艦内から引き揚げた弾丸、装火薬についての検証作業が、現物と地上実験施設で丹念に、詳細にわたって行われた。その結果、「三式対空弾」を構成する焼夷弾の自然発火は考えられないという結論が得られた。

これで、海軍当局は胸を撫で下したのである。

次に人為的事故の可能性について調査が進められた。

人為的事故については苦い過去が海軍にあつた。陸奥の爆沈以前、日本海軍では戦艦、巡洋艦級の火薬庫災害事

件が7件発生していた。その原因を分析してみると、乗組員の行為（つまり放火）によるもの3件、同様の行為によること確実なもの2件、原因不明2件。この原因不明2件も「人為的な疑い」が濃厚というものであった。

M委員会が、不審者の究明を始める、たちまちある一人の人物が浮かび上がった。某2等兵曹である。

某2等兵曹は爆発現場の3番砲塔員であり、「陸奥」艦内の盗難事件の關係者でもあった。

調査が進むにつれ、某2等兵曹が盗みをはたらいたことが、多くの証拠から判断して確実視された。そこで、M委員会は、次のように推理した。

もし某2等兵曹の罪が発覚すれば、軍法会議にかけられ処罰される。そこで罪を隠蔽するため第3番砲塔火薬庫を爆発し、自殺を図ろうとした、というものである。

M委員会は、某2等兵曹への疑いを一層深め、身辺調査に全力を傾けた。徹底した調査の結果、本人の金使いが荒く、また生家は貧乏で本人には盗癖もあつたことなどが分かった。また散財額があまりに大き過ぎるため、ある筋（つまり諜報）と關係があるのではないかと疑われた。

しかし、このように慎重な調査にも拘わらず、爆発が某2等兵曹の犯行と

特定するまでには至らず、幕引きをせざるをなかつた。

真相究明に努力したM委員会は、爆沈してから2カ月後に査定書を海軍大臣に提出して解散した。

結論は、火薬、砲弾の自然発火を否定し、某下士官の放火による疑い濃厚と判定した。要するに、「原因不明」謎の沈没」として処理された。

3 爆沈による死没者等

乗艦者・死亡者数

区分	乗艦者	死没者
准士官以上	73名	53名
下士官・兵・傭人	1,248名	929名
予科練習生・教官	153名	139名
計	1,474名	1,121名

死没者は、三好艦長以下1千121名、この中には予科練習生139名が含まれている。乗艦者1千4百余名の実に76%が犠牲となった。死没者のうち、収容されたご遺体は180体であった。

私の小学校時代の同級生に、当時予科練習生だったU氏がいた。後日、彼から次のような話を聞いた。

昭和18年当時、予科練習生の艦務実習は、2週間にわたり柱島泊地で行われていた。彼らの実習は、「陸奥」「日向」の2艦に分かれて行われ、彼が乗艦したのは「日向」だった。「陸奥」が爆沈する丁度1月前のことであった。次回実習生の甲飛11期生が爆沈事故に遭遇したと記憶している、と。

「甲飛11期」といえば年齢的にも我々と同年輩の15〜17歳ぐらいの若者だったはずだが、志半ばでのまことに気の毒な災難だった。この練習生が所属していた霞ヶ浦基地では、当該分隊が入っていた建物の周囲には立ち入り禁止のロープが張られ、周囲からは「何が起こったんだ」と奇異の眼をもって見られていたという。

4 「ご遺族の状況

「陸奥」沈没の事実は、最高の機密として部内外で秘匿された。しかし、軍艦が沈没して多くの死者が出たらしいという風聞が野火のような速さで拡がった。

乗組員の家族からは、「何度手紙を出しても返事がないがどうしているのか」という詰問調の問い合わせが相次いだ。「某方面に出動中」「陸奥は健

在だ」という返事しか返ってこなかった。

艦長夫人に対しては、乗組士官のご夫人達が直接訪問して真相を聞き出すとされたらしいが、何も知らされていない三好夫人も、「何も聞いていません。健在なのは」という答えしか返すことができなかった。

しかし、年の明けた1月6日、三好大佐と同期の有馬正文少将がやってきて、「実は……」と話を切り出し、「陸奥」の沈没と三好艦長の殉職を伝えたという。

1千121名のご遺族に対して殉職の公報が発送されたのは、さらに2カ月後の昭和19年3月であった。公報には「作戦中、西方海上ニオイテ殉職セリ」という簡単な文字が記されているだけであった。

三好艦長は、艦と運命をとみにされた。戦場に散るべき命はいささかも惜しまぬ覚悟でおられたご本人の、このような形で無念の死を思うと涙を禁じえない。

残された三好家の人々にとつても苦しい戦中、戦後があつたと思うが、せめて夫が、また父親が、武人としての最期を部下兵士とともに、艦と運命を共にされたことは大変な救いであつたと思う。もし、「扶桑」の艦長の勧めどおり会食に参加して帰艦せず、その留

守中に事故が起こっていたとしたらどうなっていたらどうかと、想像するだけに慄然たる思いに駆られる。この紙一重の判断を的確に行われた三好艦長には、何かひそかな予感みたいなものがあつたのではなからうか。

結びに

以上、偶然の出会いで『陸奥爆沈』の本を読むことになり、以前は知らなかった色々な事実を吸収することができた。

しかし、もし三好君が生きていたとして、果たしてこのことを話題に2人で話し合えただろうかと考えると私には自信がない。それほど話しづらい内容で、当事者にとっては触れられたくない話題だと思ふのである。

とするならば、私もこの事故の事実を知った方がよかつたのか、それとも知らずにいたほうがよかつたのか迷っているというのが現在の心境である。

三好君そしてご両親様、並びに未だ瀬戸内の海底に眠る9百余の御霊に対し心よりのご冥福をお祈りする。

補遺 三好大佐と同期の有馬正文少将は空母「翔鶴」の艦長を務めたあと第26航空戦隊司令になられ、昭和19年10月16日「指揮官先発」の範を垂れ、自ら陸攻機に搭乗、敵艦に体当たり、特

攻のさきがけとなってフィリピンにおいて戦死された(靖國神社遊就館に写真が展示されている)。

なお、戦艦「武蔵」「扶桑」「山城」など我が連合艦隊の主力戦艦も昭和19年10月の比島レイテ沖海戦において撃沈され大部分がその姿を消した。

ただ「陸奥」と出生を同じくし、最後まで行動を共にしていた戦艦「長門」は、先の大戦では生き残っていた。しかしその末路は、米国が昭和21年7月1日南太平洋マーシャル群島ビキニ環礁で行った原爆実験の場に曳行され、米空母サラトガ、ドイツ重巡等75隻の艦艇と共に長崎型原爆の空中投下実験(記者に公開)の標的艦とされた。それでも「長門」は沈まなかつたため、7月30日水中爆破によって処分されたという。

広告目次

(株) セレモア……………表紙3
(株) 東京都民互助会……………表紙3
ローレルバンクマシ(株)……………表紙4
(株) 武蔵富装……………43
信和株式会社……………43
(株) 和泉家石材店……………44

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。